

抄 訳

アメリカヤマナラシの根ざし増殖法

訳者のまえがき

最近、林帯造成用の樹種には、外来種より郷土種が、針葉樹より広葉樹が適すると考えられ、その苗木づくりが急がれている。広葉樹の中には、実生法や他の栄養増殖法より、根ざし法（Root-cutting）の適する樹種があり、本訳のヤマナラシや当場のハリギリ育苗がその好例であり、他にもこの育苗法の適用しうる樹種があるにちがいない。

アメリカヤマナラシ（*Populus tremuloides* MICHX.）の苗木育成は、根ざし増殖法によって1968～69年に、温室を利用して行なわれた。培養土は砂、ひる石および火山灰がふつうであり、かん水は断続的にされた。

サシホの太さと長さ

サシホ（種根）の直径は6～50mmの範囲のものが苗条（地上茎）を生じ、なかでも直径13～19mmのものの成績がよい。育苗箱を使うと、サシホの長さは30～38cmが効果的で、苗条と根はサシホ全体からほぼ均一に出る。

細砂入りの直径10cm鉢を使うと、サシホの直径13mm、長さ1.5、2.5および5.0cmの中では、長さ2.5cmのものの成績がよい。

サシホ採取の適期

同じ地域のヤマナラシ林から、6～9月の各月に、長さ3mの側根が採取された。根ざし6週間後の苗条と根の生長量についてみると、苗条はサシホの長さ2.5cmについて、各月平均で約1本が、6月採取のものは1.5本が生じた。

樹幹中心からの側根の距離

サシホ用の側根（水平根）を3本、樹幹中心から外へ長さ3mまで堀取って、各サシホを中心からの距離を確かめ、培養土に根ざしした。6週間後では、苗条と根の数は樹幹中心からの距離にほとんど関係しなかった。

培養土の種類と発根

サシホから切取られた苗条は、水耕液中では2～3週間後に発根したけれども、培養土ほどの発根はなかった。

長さ2.5cmのサシホは、細砂入りの10cm鉢で1日に2回、50mlの水耕液でかん水され、6～8週間後に苗条と根を生じ、18ヵ月で山出し苗になった。同じサシホが畑土1と砂1の培養土では、かん水3週間で苗条が生じ、根の形成がおまり、その後は水道水でも生存した。畑土だけの培養土では、砂ないし砂・畑土の場合より、根の発達が悪った。

サシホの貯蔵期間

側根はワイオミング州内の16カ所から採取され、砂とひる石の混合土に、氷点近くの温度で貯蔵された。8ヵ月後では、サシホからの苗条と根の発生は貧弱であったけれども、それでもルートン粉末処理や水耕液18時間処理よりも、無処理の方がよい生長を示した。15ヵ月後では、サシホからは苗条も根も生じなかった。

原著標題：Propagation of aspen trees from lateral roots

(by G.H.STARR). Journal of Forestry 69 : 866-867, 1971

(道北分場 齋藤新一郎)

